

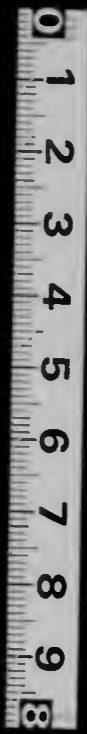
大佛書十二卷

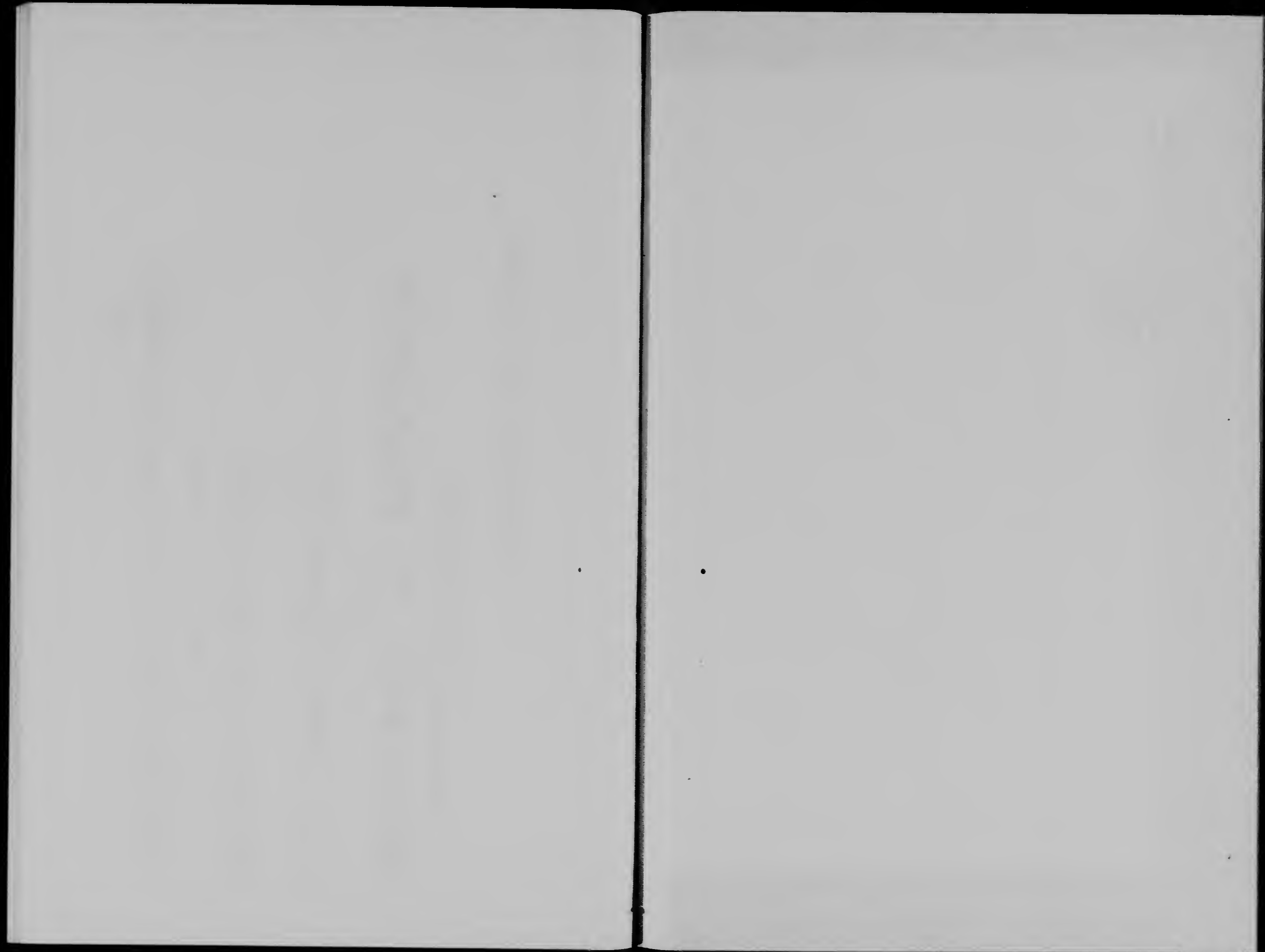
八

庫	文	閣	内	
一五二函	三二九	三二九	和	
一七架	二冊	天九	書	
		號	類	

内閣文庫	
番號	和 3256
冊數	391 (342)
函號	152121

共六





宝曆二申年十二月廿七日

南番加納大和守組

新洲安合田主殿組与唐品豊盛曾爲願

二百俵 阪宝汗七而昌撤

後三百石

昌撤系大坂村宿並に之を奉

二百俵

宝曆六子年十一月廿日跡目二百石

是よりその二百俵八返一願

宝曆九年三月廿九日新洲藩松平忠洋守

組

宝曆二年十二月廿七日

南番加納大和守組

三言信

山本長次郎正立

新洲郡南豊茶守組源次郎正勝殿

宝曆四年夏二条城に御座候
事

宝曆七年七月廿日坂本陣の御席
の事宛家と立明の日より奉
め候様行の御事と共小田原
乃驛に止まると傳ふ事七日御
にり

宝曆七^五年七月廿八日^終死

宝曆二^申年十二月廿七日

大^新著加納大和守組 二言後 山下源平義根

新^新著加納大和守組與市義淑後願

後三言後 後又助

義根系大坂の宿直に系家

明和四^亥年十月八日曾三百八俵

乞返の二百俵ハウエー一廿五

明和六^丑年二月四日死四十四歳

宝曆二申年十二月廿七日

新田番加納大和守組

新田番約集大内記組改定帝有法惣願

二言俵 石丸庄而

後言俵

改修番

有藏二条城の部去清小系の部奉
一交

宝曆三年六月八日跡目二百奉

俵是よりその二百俵ハウツ一奉奉

宝曆六年三月十二日新田番約集大内記
組

宝曆二年十二月廿七日

新河内郡長保寺組長保寺長保

新河内郡長保寺組長保元貞貴子

後言畢後

後言九節

長保京大坂の勢雲浦小系系事

宝曆八年十二月廿三日言言

依是よりその二百依ハウナナ

明和五年九月八日浅草津

奉行と兼つた所とある

寛政二年九月廿日死六十一歳

宝曆二年十二月廿七日

南番加納大和守組

言依

川井軍次席之明

改又左馬

久明系大坂の宿屋小系家事務
明和五年正月廿九日
組

西尾新洲安源坊七巻の組七上席周之巻願

宝曆二申年十二月廿七日

大御方白和泉守通

書留本仍出及神尾忠隆奉之想願

大御方加納大和守組 二言倭 神尾伊奘道憲

宝曆三乙酉年二月十八日父奉之書

勅定吟味役小補世々前代

宝曆三乙酉年四月十六日位大御方加納大和守組

本多大學組

宝曆二^甲年十二月廿七日

大津藩加納大和守組

二言信

武友又市助安平

大津藩大和守組加納大和守安卿慈願

後頼母

安平京大坂に宿直に奉り奉
夜々

宝曆四^戌年夏二条城の宿直に
病あり奉り奉り

宝曆七^丑年秋坂城の宿直に奉り

宝曆十^辰年夏二条城に宿直に

奉り御金遣取りと大坂に奉り

宝曆十三年秋坂城の警備に
母の病ありて之を

明和三年夏三条城に宿直に
ありて御筆の元副と誓し

明和六年秋坂城の宿直に母の
病ありて之を

安永元年夏三条城の警備に
ありて御筆の元副と誓し

安永二年夏代人より三条城に
ありて宿直す

安永四年四月十二日大御書組頭

同年七月廿八日坂城に宿直に

天明二年八月十日御筆組頭

天明三年八月十日御筆組頭

天明四年八月十日御筆組頭

禁裏ありて

女一宮御降誕の御時

宮内卿殿より御筆と誓し

天明元年秋坂城の宿直に

ありて

天明四年夏三条城の警備に

ありて

天明乙未年十月六日條目二百石
是より此二百俵ハ之ノ一也

天明七未年二月十日禱入水野
大膳支能

寛政四年七月廿日麻布此
火災めてそ敷町の邸敷火也

こうふ

寛政九己年七月廿日致仕

寛政十年年七月十日發と初て

自著也云

宝曆二申年十二月廿七日

大御番倉橋信俊守組長兼門田村魚願

大御番加納大和守組 二百俵 梶川主馬心峯

後二百石

心峯系大坂の御去藩本番七度
町より一にふら〜を海射に
小笠原の射式と字ハ江府也
そ、海をほ〜先一多ハハ病也
あて江府に止る

宝曆又亥年四月廿日海射法
あつて海物及〜法也

同年十月九日お祈り業沖後
何月で明の十日當中に在りて
亥令二と後ふ
宝曆七五年八月廿七日迄対沖後
何月で明の十日當中に在りて
宝曆八年十月九日お祈り業
沖後何月で明の十日當中に
在りて亥令二と後ふ
宝曆九年四月廿六日お祈り業
沖後何月で明の十日當中に在りて
何月で明の十日當中に在りて
何月で明の十日當中に在りて

十日當中に在りて亥令二と後ふ
同年四月廿六日迄対沖後何月で
何物三と後ふ
同年十月廿九日お祈り業沖後
何月で明の十日當中に在りて
亥令二と後ふ
宝曆十六年正月十日お祈り業
始の対に候りて何後三と後
何月で明の十日當中に在りて
亥令二と後ふ
同年三月八日お祈り業沖後の対に
在りて何後三と後ふ

明和元申年四月十二日湯村涉後
河川にて湯物_ニと_ル事

明和三年三月廿六日大の涉後
の対_ニに列して時後_ニと_ル事

同_ニ年十月十二日湯村涉後有て
明和十三日當中に_レる_レ事_ニと_ル事

明和四亥年二月廿六日大の涉後
の対_ニに列して時後_ニと_ル事

同_ニ年十月十六日鬼の涉後の対_ニ
に列して湯物_ニと_ル事

明和六丑年正月十日市河場始此

対_ニに候して時後_ニと_ル事_ニ明の
大_ニ口中に_レる_レ事_ニと_ル事_ニ
同_ニ年九月廿二日湯村涉後有て
湯物_ニと_ル事

明和七寅年十月十日市河場
湯後河川にて明の十日當中に
_レる_レ事_ニと_ル事

明和八年二月廿二日大の涉後
の対_ニに列して時後_ニと_ル事

安永元辰年二月廿九日大の涉後
の対_ニに列して時後_ニと_ル事

安永二巳年十月十八日大の涉後

の射に候し時後ニシテ
同年十一月十日湯射湯後
明の十日當中に在りし
と後

安永三年三月晦日湯射湯後
ありて器物ニシテ

安永四年十月四日湯目二百石
是までの二百俵はうへに
年乃春正月十日市川場始れ
射に列し時後ニシテ
明の十二日當中に在りし
と後

安永五年二月十六日湯射湯後
ありて時後ニシテ

安永六年七月廿五日死四十八歳

宝曆二年十一月廿七日

南書加納大和守組

百俵

春田政八郎次蕃

西光少人組於春日田次弘瑞孫兼祖

改泊次郎
春日田

次蕃の父春田次郎久保一先
享保十三年に小十人組に入居
御座候由て夫一うは祖又う
兼組と承承

次蕃京大坂の宿屋ふまは

奉十六きり

宝暦十年年四月二十日跡目百卒
俵是まその百俵はうえーなま
智れうらひ卒俵とたーあふ跡目
安永元辰年二月廿九日跡目の
火災めて山伏町の郵敷出うら
安永六辰年二月廿二日大納言跡目
村多ふ列しそ時後ニと跡目

寛政三亥年七月廿日祥入溪野集人支就

寛政七年十月朔日本新此

火災めて同所海所の郵敷出

うら

寛政十年年七月廿日死六十六歳

宝暦六亥年八月十八日

享保十二甲年六月廿日

大納言加納大和守組 三右衛門 森川大學子氏映

政右衛門

氏映京大坂の宿屋小糸多事
なまそ之右二条跡目代人小糸多
一時

安永八亥年十月十日於二条跡目死六十九歳
氏映の骸と系跡目通し
了蓮寺小送家

森川主親氏治書子

小糸多跡目八事三而先

宝曆又亥年八月十八日

寛延三年年十二月廿七日自

田中左衛門元陳貴子

小室清組八本十二帝尊

大内書加納大和守組

言儀

田中八十市元連

改尋常

元連系大坂の御書信小室系奉

交り申して九度小おしぬ

安永四年八月廿二日拜入徳山小室清と配

安永六年八月十二日致仕

同年十月十五日髪と剃りて髪外

申す

宝曆又亥年八月十日

寛延元辰年旦十月三日

二白中三帝忠章慈願
小差後組信田宗而支院

大御書加納大和守組

三言後 戸田新彦忠捷

改中三帝

忠捷系大坂此勢云清ふ系と奉

云反

安永元辰年二月廿九日目玉托

大員少く中谷七郎所の郵敷宗
切之と御取く合二十五と貸給ふ

安永八亥年十月八日拜入松平忠摩守と院

天明六乙亥年八月十日致仕

寛政八辰年六月十六日死六十七歳

宝曆又亥年八月十八日

享保十九寅年十二月七日跡目

大津藩加納大和守組

三喜右

伊東主水祐之

伊東主水祐之歿所

小笠原組高兵衛守五郎

改敷馬

長壽

祐之系大坂乃野玄海小系系事
二夜

宝曆十三

未

年十二月廿八日禱入高力式部左衛門

安永三年八月七日致仕發之刺

了て法羽堂云

安永又申年七月廿六日死

宝曆又亥年八月十八日

宝曆又亥年二月廿四日

大津藩加納大和守組

二信

高橋常三郎心信

高橋新吉郎心道忠願

小笠原組筒井内蔵五郎

心信京大坂の御云渡小系組事
多し

明和六年四月二十日新津藩戸田七郎組

宝曆貳年八月十八日

寛延貳年七月廿九日

寺尾孫三郎

二言

寺尾孫三郎

改定

正久系大坂の宿直小糸事

安永三年九月八日死

宝曆五年八月十八日

本州善加納大和守祖

再勅

二百俵

武蔵忠之郎安公

政十郎兵衛

武蔵平九郎安政忠願

小善信祖為根玄蕃政忠

安公京大坂の御去留小善信事十夜
明和七年八月十日深川の火災
あゝ本州海部三丁目郵便家會
ふとくは焼失門はるゝ海

之後二条城の宿並小善信を病めて

天明四年十月十七日於二条城死六十一歳

安公骸を京郊出水邊に七ヶ松

の苑光寺に送家

宝曆九年卯年四月五日

寛延元辰年正月三日

大津藩加納大和守組

七百石

下田友三郎重幸

之田市兵衛重雅惣願

小笠原組金田主辰五郎

重幸京大坂の御云隔小寺家

明和三年二月十四日新法寺法田日向寺組

宝曆九年四月廿日

宝曆八三年九月十八日家督

大津藩加納大和守組

加納大和守正藏忠子

小笠原組川口徳重守五郎

合書 加之員其次而心中

心中系大坂の宿進に系取事

午之七

安永四年八月廿二日拜入永井監物支配

同年九月十八日死六十一歳

宝曆九年四月

寛保元年三月廿日

大押書加納大和守祖

田中右衛門義孝忠願

小室後進修田中右衛門支託

景

田中金源義智

政彦次郎

源多房

義智系大坂此致云係小室家事
彦

安永七年五月廿日死六十歳

宝曆九年四月

宝曆七年十一月廿七日

南無加納大和守組

三信

松平右之助正保

松平信房正時

小室信房正時

正保京大坂の宿屋より多事
高々

宝曆十三年秋坂陣の流落小室
宿刺と勢心

明和六年秋坂陣の流落小室
御塩場奉行と勢心

安永四年十月十二日
入倉宿教馬支配

安永^申年十月十二日新田藩
紀伊守組小入

宝曆九年四月吉日

宝曆八年十一月廿四日各御目

大津藩加納大和守組

長川加納務新田

小室後組松平頼母支統

森川岩流而仗勝

改七節奮

仗勝系大坂の宿屋に系る支
三度及こまうり市糸垂の支副と
片と心

明和三年二月十日新田藩
組 教馬

宝曆九年四月廿日

寛延三年六月二十日

本所加納大和守組

三右衛門

石川金吾春原

石川平次衛門善忠表子

小善治組松平頼母支那

改国書

宝曆十年年夏二条松の御会席
よりとまより 高く二条の御会席
よりとまより

宝曆十二年年夏四月廿二日
居郵なるは八日宮内及新宮
坊中一甫う上地を治す

明和八年年二月廿二日大御所

の討手に列して時後三と居る
同年二月廿九日実方の赤石川
平太直の出奔より一事にうめて
云はしむ所の健と居居せしう
程れく一事分明かつらうと
出ぬ
安永元辰年二月廿九日大御所院
の討手に列して時後三と居る
安永四年秋坂城の勢を潰さる
沙壇等の事行と智む
安永六年正月を東よりと
はと先

安永七年夏二条城の宿直に
さうと居強り役とはしむ
天明元丑年秋坂城の宿直小
さうと先跡を役と智先
天明四年夏二条城の勢を潰
小はしむと先跡を役とはと先
天明七年二月廿九日大御所院
天明七年七月朔日坂城小
宿直にさうとハ沙壇時後三居
討手に居ると是より沙壇の度毎
に恩賜あり
寛政二年二月二条城宿直のうら

九月十九日

宮内卿殿より此沙使よりて

禁裏(系りて)と事と勢心

又明のま此年二月四日

禁裏(

氏於卿殿より此沙使と勢心

寛政五年秋大坂城の官集

とあり

寛政七年二月十六日物場野

て兼沙将の平均の沙使と勢

三月四日小倉此沙将に海

をきた先をて立一に道をう

痔疾めて痛をうてさし付

所將場小倉より一とて夜

小倉に歸る

寛政八年夏二条城の御書

にあり

寛政十一年二月十日南中山

大宮在りて麻将乃為るを

之十日麻将とては先とて夜

之にあり

寛政十一年二月十日宮中に

てきて御役と免りて小倉に

入るは溝口相模守支就小倉

同年同月十二日落居小及之次
子作可也

宝曆九年卯年四月廿日

宝曆六年辛卯年四月十日家督

新井藩加納大和守組

後志原藩の長徳忠房

小笠原藩組松平頼母之統

言俵各 後志原又三郎長昌

内殿系軍右 後志原藩

長昌京大坂の宿屋小系多事
三反

明和三年二月十四日新井藩京極守部
組

宝曆九年卯年四月五日

宝曆三年十一月二日

平清加納大和守組

上田米馬元孫書子

小美濃組田主孫書配

二言後 上田乙之助元局

改三言後

元局系大坂の宿屋小美濃事

安永七戌年二月廿九日輝入長谷川利壽
支配

天明六年二月廿六日小谷川小支
所の郵敷出ふうり

寛政三年七月廿九日致仕

同年十月十三日發之刺是是符
少之云

寛政十年年七月十日死七十五歳

日月各百病不出候

宝曆九年卯年六月十日

宝曆六年壬子年十二月廿七日源目

大冲署加納大和守組

四右

中山隅次郎勝親

中山之右左衛門勝卿二重忠願

小室傳組田中出羽守五郎

後三重忠願

宝曆十二年壬子年四月十八日新冲寄酒井小平次
組

宝曆十二年九月廿八日

大津藩加納大和守組

後寄手右

冷本乙三郎心園

政左系

常力
九右更

明和三年十二月廿七日跡目四百

石右是まての二百俵八返一割

明和四年十月廿九日津腰物方

御洗地玉系
冷本九右更
心園

宝曆十二年九月廿八日

大津藩加納大和守組 百俵 田沢玄之助正膳

後百俵各

所廣安事に於田沢玄之助等と申願

同日廣安事百俵と給ふに暫先の
うち百俵と給ふに後百俵と給ふ
正膳系大坂此宿事不詳に
ふり事度

明和元申年十二月廿日跡目百俵
みに勢共うち七十五俵と給ふ
作と事不詳に是迄の百俵はうら

古紙

天明乙巳年十月廿六日老祥賜英金板二
入永井監物支配

天明六年七月廿二日死七十九歳

宝曆十二年九月廿八日

本番加納大和守組

百俵

安後猪之助系

後番

沖廣安後系安後系番首の系久三曾孫

同日原系百俵と給り替はらり
百俵と云ふ一あり作と云ふあり

之後父系久三元沖留守居也
なり布衣以とにりる也

宝曆十二年七月十九日佐沖小姓組小系

紳中守組と沖番替

明和元申年十二月十六日

西河納戸組改元左系定規願

大津藩金田遠江守組 二言依 石丸六兵衛定心

明和四亥年四月廿四日 死二十九歳

明和元^{甲申}年^同十二月十六日

大津藩金田遠守組 二言儀 瀬名源吉而定如

大津藩後臺肥後守源吉而貞雄惣願

明和二年十一月十日 湾对湾说

西川で沙羅紗及海黄及梅留及

之信系以後津小納戸と成り

湾对湾说ある事二十七夜器物

及 幸之信白

明和三年^戌二月廿七日^任 津小納戸

同年十二月十九日 布衣着之免道

明和七宮年四月十日湯村に
所用と誓ひしに、湯馬と誓ひし
同年五月六日光の所供を
命せり。

明和八年十月十三日本下
川の多り、所放誓ひの少く、
所供に候し、真鴨、村田
同月十二日時後と誓ひし。

安永三年十月廿二日所小旗
の画富、小松系、誓ひと画
し、と誓物と誓ひし。

安永六年正月廿七日光

旗松の料より、
四月十二日所供、誓ひ十七日光

所宮奥の院、所宝塔、後て、
あり、所誓國と誓ひし。

大猷廟、誓ひし、所誓國と
誓ひし、後自の洋札と誓ひし。

大日所供、誓ひし。

安永六年二月六日、所馬場

あり、所事流、滴馬の村、
候し、同月廿八日、所誓ひし。

所誓ひし、所誓ひし、
所誓ひし、所誓ひし、
所誓ひし、所誓ひし、

天明六年十月二日

先河代河病中に書りしと

黄令^三と云ふ

同年同月廿六日沙^りの^りと

して令^三と云ふ

天明六年十月七日書えの如

に^りと云ふ

天明七年十月七日書中に

に^りと云ふ

に列す

寛政二年十二月十八日吹上

系馬沙^りの^り

寛政三年九月十九日沙^り

沙^りの^りと云ふ

吸物と云ふ

寛政八年正月十日伊勢

万助貞春の如く古

武^三と云ふ

万助貞春設計と加^へと

画^三八貞如^三令^三と云ふ

父貞雄^三の如く画^三と云ふ

令^三と云ふ

正教胡^三と云ふ

武^三と云ふ

全於十二冊と捧く

寛政八辰年九月廿日家馬
御覽のり

寛政八辰年十二月廿七日跡目吉
石是郎の二百俵八返一紙

寛政十一辰年十二月廿日先代
力古義の画畵令紙せしとて
杉津守正教御所の郵へ百通
て白根殿と紙紙

享和元年三月廿二日将野
貴川院へ命せらるる画の御用
と紙をへしと作出る也

享和三亥年八月廿六日二重殿室
源次郎の事はう月で宿直と
止免らるの指し紙へしと作
出さるる十二月十日免さる

之後致仕の事と紙へ画乃
御用と免さるる事と紙ひひ
と紙小勅し画一と作出る也

文化四年七月廿九日致仕

同年九月廿六日誓と判了と免文
と云

明和元^{甲申}年十二月十六日

大津藩金田遠江守組

大津藩長尾清直守組の所在の定書類

二百俵 西尾清直(貞明)

後二百俵

後二百俵

貞明系大坂の御金出小系守事

本番七交代入三交代九十を云

天明六年三月六日添目二百俵

是よりその二百俵はうえーを云

天明七年秋大坂城の御金出小

系守時御金出目付と云ふ

寛政六^寅年十二月廿七日旗入酒井紀伊守

支配

寛政九己年四月十日致仕鶴翁
少云

明和元^甲年^丑十二月十日

大津藩金田遠江守組 三言後 依指河守佳明

改又第三席

明和之戌年其二条松の松原小
多々つきに父の病を以て江戸に
止まらる

明和七寅年秋坂城の法満より
届言に父の病ありて江戸に止
まらる

安永元辰年其二条松の松原

大津藩長部親元守延基助佳常為願

年月

安永二己年助登夜よりと勢む
安永三己年秋坂坂の法席ふき
つきに父の病ありく江府ふ止ま
安永七己年其二三条の法席ふ
くあり病あり父の病ありく江府に
止ま

天明元五^己年秋坂坂の法席に
あり病あり父の病ありく江府に
止ま

天明四己^未年其二三条の法席に
あり病あり父の病ありく江府に
止ま

永抄了す

天明六己^未年九月朔日より十月
六日まで登夜よりと勢む

天明七己^未年又八月八日位新御殿山口勤修坦

明和元申年^丑十二月十六日

大津藩戸田清治守延吉高常典司親願

大津藩金田遠江守組 二言 知久侯之助頼豊

頼豊京大坂北寄屋小倉町

安永三年八月九日^{終全} 西九所腰物方

明和元^申年^宣十二月十六日

大津藩本堂伊豆守組又吉市正勝三曹助

大津藩金田遠江守組 二言後 深津辰之丞心換

心換京大坂の宿直に参事
二言後

安永元^辰年^宣二月廿九日大崎沙流

北村^子に候しと時後三言後

安永二^乙年^宣八月十三日^初位^宣死二十六歳

明和元^中年三月十六日

大御番金田遠江守組

大御番本堂位皇守組伊織忠清願

言後

忠輝兼十郎忠輝

後源八郎

忠輝京大坂此清酒小系多友

十四夜

天明三年六月廿日

位

大御番組取

天明四年二月十日

宿願小系多友八御暇白根

時後三子孫系是より

地恩賜あり

天明七年秋坂本の法皇の

系図

寛政元年三月三日海目の宮に
是よりその二百餘の宮を

寛政二年夏二条海の宮に

小系と明れ

寛政三年二月三日

禁裏

仙洞新所(遷幸の御所と

して

右の御殿より此所使と習ひ

寛政又五年秋坂本の法皇の宮

寛政七年三月五日小系海將

の降小系と云ふ

寛政八年夏二条海の宮に

小系家

明和元申年十二月十六日

大洲藩金田遠江守組 二言儀 伊庭口前二席金五

大洲藩金田遠江守組左金次郎信重願

後三言儀

明和之戌年四月二条城此御書
ありし

明和又子年六月伏合し二条城
にきて宿也す

明和六也年秋坂城の御書ありし
毎きに母の病なりしが御書
安永元辰年四月二条城の宿也す

多々つぎふ父の病を以て病ふ止ま
るるにけしう十一月七日父去て

明の

安永二年二月七日源自二百俵

是よりその二百俵はうえりなる

同年六月助立夜也りとす

同年十月廿八日大御所の対はに

列して時後ニと後家

安永四年秋攻城の警備の事と

並拂とす

安永六年十月代人よりと攻城の

事と宿直す

安永七年四月二条家の警備に

事と

安永八年九月廿三日大御所の

対はに列して時後ニと後家

安永九年四月廿日大御所の夜也りと

事と

天明元年二月二日大御所の夜也

対はに列して時後ニと後家

同年初攻城の宿直に事とつぎふ

病めくは病ふ事とす

天明四年夏二条家の宿直に

事と御破損を以て替む

天明五年夏代人令して二条松
にきて發去す

天明六年夏代人令して二条松
母系門で護衛す

天明七年秋坂城に糸川で
宿直す

天明八年十月至夜中り勢
寛政元年十月三日大的寺後乃

對に列して時後ニと居り
寛政二年夏二条松の御去留不

しあり強し役と侍せむ
寛政三年夏代人令して二条松

にきて宿直す

寛政四年四月十日從中近友
甚左衛門死刑不處とてあり於

宿直と止り六月十七日虎方
同年七月廿日麻布の火災めて

麹町の郵便少ふうう九月金
二十五と貸法す

同年九月十日麹町二町目横町の
郵便田なるよりして賦うと金

十五と川料出りて法を別不
法と勘令十五と居り

同年十月九日中蔵寺門外巨徳

求馬助とう上地のうち又百坪は
居郵の地不詳なり

寛政又五年八月坂城の警備不
多し介御差を以ての役役と誓じ
寛政七年三月又日小金御將
のやまゝ歩行の御子と信く先々侍
分限高に盡し御扶持方を以て
寛政八辰年夏二名城の御警備に
備はり

寛政十一年秋坂城は宿願不果
先陣の役と誓ひ

明和元^{甲申}年^巳十二月十六日

西小支組改漢番語在倉、並房題願

大井藩金田遠江守組 二言儀 漢番吉之丞連明

後三言儀

明和四亥年二月廿日大的涉後の
對子に候し之時後ニ之終了

明和六丑年四月廿七日涉對涉後

あつて器物互之終了

同年十月初日大的涉後有之

時後ニ之終了

明和七寅年十一月十日涉對涉後

あつて明の十二日當中おとすて
黄金ねとと後

明和八年十月十三日湯射湯後
省て湯物とと後

安永二年三月廿日湯射湯後
省て湯物とと後

安永三年十月十三日大の湯後
の射子に列して時後とと後

同年十月十八日湯射湯後省て
明の十九日當中おとすて

黄金ねとと後
安永四年四月廿七日湯射湯後

あつて湯物とと後

安永五年二月十六日大の湯後
の射子に列して時後とと後

安永七年二月八日湯射湯後
あつて湯物とと後

同年九月廿日大の湯後あつて
時後とと後

同年十月十日湯射湯後あつて
明の十一日當中おとすて黄金ねとと後

安永八年九月廿三日大の湯後
の射子に加つて時後とと後

是より先

同年九月六日跡目二百俵是道の
二百俵ハ収らる

天明元五年二月二日大的沖渡
の對主に加之りて時後ニと存る

同年九月六日灣對沖渡者ニ
賜物^三及ニと存る

天明四年九月十六日灣對沖渡
ありて賜物^三及ニと存る

同年十月廿二日好業沖渡
ありて明の廿三日當中心算にて
賞金^二枚と存る

天明六年正月廿七日大的沖渡
の對主に候し時後ニと存る

天明七年九月 日灣對沖渡
ありて賜物^三及ニと存る

天明八年十月廿九日好業
沖渡ありて明の日當中心算にて
賞金^二枚と存る

寛政元年十月二日大的沖渡
の對主に候し時後ニと存る

寛政二年九月廿七日灣對沖渡
ありて賜物^三及ニと存る

寛政三年二月六日大的沖渡の

対ふ小俣と時後ニと後
寛政四十年二月六日大御沙汰の
対ふ小俣と時後ニと後
同年四月十五日沙汰ありて
瑞物_三と後
同年十月十八日同一業御沙汰
ありて明の十九日官中_三と後
寛政_二と後
寛政又五年二月官中_三同馬場
御事流滴馬の対ふ小俣
紅地に令丸に矢二本と折送_三
と並_三氷干と着_三萌_三

令入の稀毒に丸龍と並_三
丸龍と_三て勢光同月
六日官中_三と後
寛政六_三年九月十六日沙汰ありて
瑞物_三と後
同年同月十九日並_三沙汰ありて
瑞物_三と後
寛政七_三年三月五日小令御沙汰の
瑞物_三と後
寛政九_三年十一月十六日沙汰ありて
明の十七日官中_三と後
寛令_三と後

寛政十年年又月廿九日狩射法鏡
の月にて瑞物ニと経る

寛政十一未年正月廿四日年以狩射

の業に心とをしめる事と計上

春秋狩射法鏡の時之形とを

出倉とよの作とある是聖房の獨母と
意とす所なり

同年六月廿二日狩射法鏡有て

瑞物ニと経ると是よりと年毎小

二夜と出て是賜かたなりと云

寛政十二申年十一月廿九日狩射法鏡

ありて明の廿日管中小る事とて
賞令ニと経る

享和二亥年十二月十日文化三亥

年十二月七日文化又辰年十二月

廿二日狩射法鏡ありて明日必

管中に在りして賞令ニと経る

之は又杖と云ふ

文化六己年十一月廿九日文化七年

十月廿七日文化八未年十月十六日

狩射法鏡ありて明の明ありて

管中に在りて賞令ニと経る

文化十己年二月十日田馬場を

神事流瀧馬の射と云候
同月廿八日西陣に在りて賞令ニ

と後系

同年十月七日湯射湯洗ありて
明の八日宮中に召されて黄令板
と後系

文化十一年二月各言馬場
ありて神事流瀧馬の射あり
翌月十六日宮中に召されて
黄令板と後系

明和元申年十二月十六日

奈州番金田遠江守組 百俵 三橋教貞信室

小十人組に三橋九右衛門信俊惣領

後百俵

改内彦允

九右衛門

同日藤原百俵と後つと替り
うち百俵と替りしは作と替り
信室系大坂の宿直ふ多事
十度

安永元辰年夏二番旗の宿直ふ
多事と御合カ令後取也——

大坂に系家

安永四年秋坂城の法清に
系家と沖谷目有と伝ふ

安永六年八月八日藤目百平傳
智のうちり平傳と記しあり

作と系家と足迫の百傳は同じ
系家

天明元年秋坂城の聖雲傳ふ
系家と宿別と智む

天明七年正月廿三日新沖番天野阿波守
組

明和二年三月十二日

大沖番金田遠江守組 二番 小林正市正武

沖谷浦番之次郎林之助在馬正統編源兼祖

正武の父平四郎正房が屋位
より大沖番に石出さして
父の源と嗣ころうち矢ぬれは
正武とりつて兼祖とす

正武系大坂北宿番より系兼夜々
明和五年七月十八日父矢ぬれと
系沖の料おけりいれは遠源を

教皇

天明二寅年七月七日祥入戸川山城守亮
同年十二月廿二日死

明和六丑年四月十日

明和元申年十月八日

大津藩稀業紀律守祖 高若 小倉政之照心栄

小倉藩守正英勉願

小倉藩祖奥田英隆守亮

改藩守正

心栄系大坂の宿直に系承奉

天明二寅年七月六日祥入徳田陣心支配
寛政元酉年九月廿日死

明和六五年四月十日

明和二年八月官源目

大津藩稲葉氏傳等組 之旨 江原勘助寛五

江原勘助在重(全)之願

小津藩稲葉氏傳等組之旨而之

寛五系大坂北寄居江原系
三夜

之後眼疾之勢加甚

安永七年十二月廿七日
支配 入得津式部

天明元五年十二月十二日致仕

明和六年四月十日

明和二年四月十日家督

本村耨耨景純傳年組

三傳

大長六後忠英

大長六後忠英子

小長尾組頭三六郎支那

忠英系大坂の跡云備小長尾

安永六

申年十二月十日輝入戸川山城守支那

安永七戌年七月九日死三十三歳

明和六年四月十日

明和二年七月三日

本州諸藩系紀傳守組

口名

遠山政之丞系持

左山云改而為系持子

小善清組有馬系持死

系持系大坂の警云係小系系守

天明二年十月十九日

支配

天明三年七月廿六日致仕遊樂

中云

寛政七年七月廿六日死六十一歳

明和六五年四月十日

宝暦三亥年八月十日同日

松下清玄子

小笠原能右馬守玄純

大津藩稀業純行守祖

三言

松下清玄清氏真

氏真系大坂の宿屋に在りし

安永二年秋代人として二条坂小

糸川にて語云信一明の平乃年

三月宿屋はけりりし一時遊府

元市場の驛めておる京田河津

と衆一学多りして殺害に及りし

之を以て此の二人と相尋

安永三年七月廿五日隠居

横死せし事不甲好むる事とて

同日淨定河小右衛門と云

四月廿日二条松尾宿に居り

しきり後角元市傷村に傷め

京田河内宿と云ふに休あり

一學系と云ふ河内宿と云ふ

次の間めて河内宿と殺害し取

と云ふ處と竹杖と取らる

うち一學隣の某店へのも

自殺せし事相違二人とも死

せしと云ふ事と云ふ後

そ程なく御音に意きは御音
石放すも隠居して情ありと
作らるる息男金次郎兵衛に
三百二十俵のうち二百俵と給ふ

明和六年三月十四日

明和二年三月六日

南書院葉氏傳守組

昌後

松平保之而義真

松平岩之而義真子

小室信細松平米馬助五郎

政原金

義真系大坂の宿屋に在り奉
度々

安永七年夏二条の宿屋に

在り時御筆の五郎と稱し

天明六年三月廿日新井安政同能登
組

明和六年四月十日

宝曆十三年十月三日

大津藩御筆代官組 三官 長岡秀次而某

長岡九郎某貴子

小善信組神宮敷直門支院

同和八年十二月廿三日 斬罪

同和八年秋坂城の法務小幸子
同日評定所小幸子にて小善信
加後去言左衛門 忠良母みはとむその
に通一みはく之止宿せし宛
そと去言左衛門 大佑母八重より
女阿是口借り法務小幸子に

近江守の御て八重と方り宅へ
多しと催促せし事と御印に
存し八重と殺害せし事と御
みはしと殺害せし事と御
せしと罪の御て御て
斬罪に處せらるる御御後守
政倫傳へて二百俵と収りれて
家絶せらるる

明和六年四月十日

菅沼宗清名共之書子

小善後組市橋大膳支所

大井善福兼純守組

再初

二百俵

菅沼左衛門吉久

吉久京大坂の宿屋に在りし

安永八年十月八日祥入菅沼左衛門

支所

天明八年三月廿六日死年九歳

明和六年四月十四日

宝曆十一年九月二日源目

本村書齋景純侍組

二百俵

為唯広而定賢

改侍奉

明和八年十一月三日拜入井上修理支配

安永九子年七月廿六日官告上法

権現の社内此池めく水死

之れハこと奉と高直に中せり

八月十三日二百石と収らばて家絶

之り

為唯広を定置願

小室経組市橋大橋五郎

明和六年四月十日

明和六年八月三日

牛奥大八郎高昌殿

小善后組没案在在の支死

大津藩稲葉氏修守組 三言後 牛奥大八郎高昌殿

安永二年七月十二日死三十一歳

明和六年四月十四日

寛延三年三月六日同日

大田藩稲葉紀行守組

現年百十右

松永安次市改央

改之直之出

松永市十市改房出子

小室信細妻本平市守死

改央京大坂の宿直小室守及

安永元辰年二月廿九日同子の
火災めて澁河屋の郵敷火に
うらま

安永三年年十月十二日大田の宿
の村子に候して時後ニと候

天明二宮年十月十八日大津藩組取

天明四宮年二月十日二宮の
宿直に多目ハ沙服白根村
時後ニシテ後日付后ニ付恩
賜有之

天明七未年秋坂城の詰席ハ
多目

寛政二日年二月廿六日輝入吉本
瓶後守支取

寛政十未年八月十二日死六十六歳

安永元辰年正月十八日

宝曆七丑年十一月廿七日

小宮山内膳昌一惣願
小宮藩組市橋大膳支取

大津藩組葉純伊守組 官若 小宮山松之助宣茂

改七嘉永

同年夏二条城の宿直多目
安永二辰年秋代人等ニテ坂城
に多目ニテ詰席す

安永四未年秋坂城の詰席ハ
多目

安永五申年冬代人等ニテ坂城
小宮川ニテ宿直す

安永七年夏二条城の宿直に
至る

安永八年夏代今より二条城
に参りて宿直す

天明四年夏二条城に参りて
宿直す

天明五年夏代今より二条城
に参りて宿直す

天明七年秋坂城の宿直に参りて
宿直す

十月十八日

御所御造管見より所々途中迄介

の由りと令せらるる天明の

寛政三年宿直をすくゆは

のち七月八日管中に参りて

宿直せりの事に参りて

白浪ねとと宿直す

寛政五年秋坂城の宿直に

至る

寛政七年三月各小令御將

の侍歩行纏子と勢心

寛政七年八月十七日新汗書曲淵出羽守

組

安永元辰年正月十八日

明和四年正月十日家督

大津藩稲葉氏守組

津川守前信政忠願

小笠原信正市橋大膳支院

三石 森川虎三郎信政

内右衛門

後助齋門

信政系大坂丸宿直に系家事
十二度

天明元辰年秋坂城落着の時
沙汰役と暫免

寛政三辰年二月十日大津藩組頭

同年同月十三日二条城の宿直
に系直ハ沙眼白根取時後ニ

治り世後もけ恩賜ありけ年
禁裏

仙洞新御所(沙移花の御所)
せりして

刑部卿殿より此御使と誓ひ十
二月四日なり

寛政五^五年秋坂陣の結清の
にあり

寛政七^五年三月五日小倉御將
の降参子と誓ひ

寛政八^五年夏二条城の宿直
にあり

寛政十^五年秋坂陣の結清の
にあり

安永元^辰年正月十八日

明和六年十二月四日

右田新次郎甚英養子

小善後組長田神守五郎

大津藩稲葉氏侍組

三言後

右田主馬由頼

改左系

同年二月廿九日同士の火災ありて
下谷長者所の邸敷火に焼
安永三年九月二日新津藩仙石次郎
組

安永元辰年正月十八日

明和元甲申年十月八日

大津藩稲葉紀行守祖

二言信

福王市右衛門信繁

改及助

福王市右衛門信時殿願

小善信長同前守祖

信繁系大坂の宿屋小糸守事
十二夜

安永同前年六月十二日若孫父市右

信傍の宝永の夜

常憲廟一軸系沖業湯釜に及被渡

よりさきよりと沙別當大慈院を

中身包ハ再真とて執事

寛政三亥年十月廿日祥入南郡主税支配
寛政四子年十二月十九日致仕
寛政五子年二月七日死五十二歳

安永元辰年正月十八日

大津藩稀業記付守組再勅 天野金三郎改能

天野平十郎改能若子

小善治組妻本平四郎之死

改能京大坂の宿直小の弟の事
三亥

安永九子年七月廿六日祥入牧野内通支配

天明六子年十二月廿九日大津藩
酒井隠政守組也入

安永元辰年正月十八日

宝曆十二年十月六日

本州藩籍集記付字組

二言信

吉田富次郎重誠

吉田於母並和敷願

小室信保井上修理亮託

重誠系大坂の御子孫不系多事
度

寛政七年十月十六日老祥賜英金二
坪田至昭支託

寛政九年六月廿六日死七十二歳

安永四年八月十二日

明和二年十二月五日

大内藩稀葉純行守組

三右衛門

鈴木瀧之助長通

後又三席
乃重為

安永六年八月十八日

同奉秋取候の法溜り
安永九年十月廿七日
永井信謙守組不入

安永四年三月十二日

中川十庵の真昌書

小善庵地号野分元文宛

大川番稀葉元行守組 再節 中川十庵の頼常

後七左衛門

安永六年三月三日新川番仙石治兵衛組

安永四年三月十日

宝曆九年八月六日

安永四年三月十日

依野五郎政成

小善治能奥田兵衛守

依野五郎政成

後十卷

安永六年八月十日

天明二年二月

安房守組

安永四年四月十二日

安永三年十一月六日

本州青柳葉託守組

二儀

寺尾辨之助心寛

改後

心寛系大坂村宿也小糸系也

天明七年正月廿三日新洲青柳山古勘

組

寺尾定春(心寛の子)

小糸信組(寺尾若狭守系)

四月十二日病不復

安永四年八月廿日

明和四年九月廿日

南番稀葉純侍組

二言字

根室御宮心常

後又席

安永八年八月八日拜入宮城之御支配

天明乙巳年五月七日南番太保

能登守組入

根室御宮心常

小室後組後急書書院

安永^{乙申}年十二月十九日

本州藩葉託守組

二言依

朝比奈次春昌始

後河内守

小室治組之託守組比奈次織於昌章始願

之後父昌章二凡河内守始

ナリト布衣以之小列す也ハ

天明二寅年九月十日

位

河内守初小住組

仙石三枝守組

安永^申年十二月十九日

本州藩籍集紀伊守組 三依 算 还^三市方懿

後三依

天明二亥年六月六日湯目三依

是よりその二依ハ一ツク一なる

天明二卯年五月廿九日輝入水野徳之丞

寛政三亥年六月六日死守八峯

安永^六申年十二月十九日

河表河川切取番之段日野金之権心極表子

大洲藩稲葉純行守祖 百俵 日野金之権心極

改免五郎
忠右衛門

同日原米百俵之段日野金之権心極表子
百俵之段日野金之権心極表子

天明元^五年七月初日^{終全}死^任卒^位日野金

安永^申年十一月十九日

右署稲葉純守祖 二條 渡邊九次郎英^{サカハ}

西九洲廣安寺之流渡邊原三郎博繁

安永七年夏二条城の宿屋小
々多々きに渡邊の沖田ありハ
江戸小止ら也

天明元年秋坂城の宿屋小
崎の宿屋に父の宿病ありて
江戸小止ら

天明二年正月十日父歿也

と終る所の料おぼしき事
送跡を記す

天明七年秋坂城の落居り
ありきに毒の宿病うて江戸
お止る

寛政二年夏二条城の落居り
あり

寛政五年秋坂城の宿居り
ありきに病おぼしき事
寛政八年夏二条城の落居り
ありきに病おぼしき事
寛政十一年秋坂城の宿居り

寛政十一年秋坂城の宿居り

安永七戌年二月十日

安永六丙年八月十三日家督

大内藩稲葉氏守組

四目三右衛門
七斗

荒川八右衛門重隆
小室彦彦守
荒川源吉詮費

改 主斗

長尾

詮費系大坂の宿屋小糸系
三夜

天明三年九月廿六日
乃對子に加之月て得後と
天明四年夏二条城の宿屋
とありし所換地なりと誓心

天明七未年二月六日大御沖夜
の討手に列して時後と後を
同年秋攻取津藩の時抄と夜と
はと免

寛政二戌年夏二条城の宿願
をあらうさに病めて江戸に止
まるとはわかれ

寛政二戌年十二月廿二日拜入海野佐後守
支配

寛政三亥年六月廿九日死三十七歳

安永七戌年二月十二日

松尾伊登の正隆題願

小善後継高太依守支配

本番稲葉紀行守組 再勅 三言奉 松尾勝之丞改聽

改聽京大坂此宿願小善後
代人ももに八夜

天明六未年二月六日本番沙所
の郵敷少めうら

寛政六亥年九月廿日沖藩不相通小善後
入五相入武田河内守支配

同日丹後兵部少輔忠嗣那信の郵小

石うして跡不修事何月て
御書に意をこし小善信あ入
らむと親信をくく作さる
同年十月十日親信と免る

安永七^戌年二月十日

安永三年六月六日

大津藩稀葉紀行守組

三言

御後瑞々市利常

御後市利常

小善信組

改定之

同年夏二条城の宿屋に
天明元也年秋坂城の宿屋に
系と御金
天明四年夏二条城の宿屋
系と御金
天明七年秋坂城の宿屋に
備

天明七年秋坂城の宿屋に

系り

寛政二戌年夏二条松の宿舎に
系りと跡あり後と勢む

寛政五丑年五月三日海軍少将
を以て系りと作と系り

寛政七卯年五月三日其期奉
を以て系りと作と系り

寛政八辰年夏系り松尾清
系り

寛政十一未年秋坂城の法清に
系りしに病めく明家

寛政十二申年二月廿二日於大坂城在死卒案

安永七戌年二月十二日

大津藩稀業純守組

再部
三信

御後忠右衛門守武

改八巻

同年其夏二条城の警備小系系
屋等に母病め江府小止先
ら也

天明元丑年秋坂城の宿直也
系々屋等に病め江府小止先
天明四年其夏二条城の警備小
系々宿直と侍心

御後忠右衛門守武

小系系組御後忠右衛門守武

天明七未年秋坂本隊の強襲小舟
御被損なれりと思ふ

寛政二月年夏二条隊の強襲小
舟に付時洛中洛外の上りと
片とむ岩垣とてく岩に海に
のち明れ

寛政三亥年七月八日官中に
石上にて糸地出りの事に芳
町とてとて白根ねとて思ふ

寛政又丑年秋坂本隊に岩垣小
舟ありし御業重の石副と習め
寛政七卯年三月廿小舟御將

の時安江御子と習先

寛政八辰年夏二条隊の強襲小
舟にありし御業重の石副と習む

安永七年二月十二日

安永四年十一月廿五日

松平公美正庫惣願
小善後継存何と依守奉

大津藩稀葉紀傳年組 三言 松平吉備正英

正英系大坂の宿屋に系る年
十度

天明三年九月廿六日
力射身に加りて時後と経る
天明四年夏二系継の登居
とて御弓矢の勢心

天明六年七月十七日南割下水

の郵水員めり色ハ種好く全拜
と候し候ふ

寛政五丁年秋取城の法席小
と申す御座候事候と勢心

寛政七丁年八月晦日拜入巨勢六左門
支配

同年十月七日死早十六歳

安永七丁年二月十二日

安永六丁年四月吉日家督

大津藩稀葉純行守組 言者 中川松常忠和

内字係

改 惣五箇

忠和京大坂の警云備小系事
六度と申す二系候の御座候
牙引の役候と勢心

寛政三丁年又月廿八日大津藩組頭

寛政五丁年七月二日取城の

御座候小系色ハ御座白根十
時後ニと候事候是より申す

けし恩賜りつる

けし内者吸院表の如く是くせりふ
種らうけ色ハ赤濁なり

寛政八辰年夏二条邸の警束
にふあふ是より先

寛政七卯年三月廿日小金
所符のせきし跨馬よて御みと
片と先

寛政十卯年七月廿八日致むの
ふとく日光の洋禮と先と色
八月三日とくく七日洋禮十日
帰家

寛政十未年秋坂邸の法席
にふあふ

享和二戌年夏系尾宿並に
備ふ家

文化二丑年秋坂邸の法席
と先

文化二辰年夏二条邸の宿並
にふあふ

文化七卯年二月廿八日西丸小主人
同年十一月十六日布衣着と先と

文化九申年三月八日西城の御目付
文化十一戌年三月十日

竹外代君沖旗の法席と先と色
五月廿日西邸北柳の間と先と酒

吸物と流る同月七日無夜

竹下代君沖の厚く此沖田と勢

先て芳なりりとして時後と流る

同年九月十六日

玉樹院君沖葬式沖法事此沖田

と勢先とく芳なりりとして巻物三

と流る

文化十三子年十月廿四日沖先と流

文政元寅年十月廿九日攝捕の

役と兼つて作と流る

同年十二月十二日新むのふと加役

と流る

文政二年 月 日 死六十一歳

安永七戌年二月十二日

安永六申年十一月廿九日

本町番稻葉純守組

二言後

法目助之助

後市番

天明三年八月四日
本町番稻葉純守組
法目助之助
後市番

安永七戌年七月十九日

大津藩稀葉紀行守組 百俵 菊地過又郎武則

元方印細之義記之帝惟良恩願

同日原米百俵之給りと替はら
百俵之目一あり作とるあり

武則京大坂の宿屋小幸と

天明七未年正月廿三日 終屋 新津安山

勤芸信組

安永七^戌年七月十九日

本陣書稀葉記伊守組 二言後 天野宗茂久展

後三言石

久展系大坂の宿屋子系事

きり

天明元五年秋坂屋の宿屋小

きり

天明三卯年夏代人きり

二条松にきりて宿屋子

天明四辰年夏二条松の宿屋小

年々

天明己酉年秋代人よりと坂本
より河で勢を清む

天明七未年秋坂本の藩兵に
より

天明八申年十月三日夜中
よりけし治りてはの年まよ
勢心

寛政二戌年夏二条城の宿願
より

寛政又申年秋坂本の藩兵に
より

城の藩兵より河で病篤きよし

若き色ハ秋むと免されて十二月

十六日卒那小系より女二日あり

二条城より河で病篤して坂本

帰る明の寛政年正月十二日父

去てりれハ二月二日卯より

白根社より

寛政六亥年四月二日跡目三百石

是より二百年後ハうき一翻

同年九月廿六日陰州沖淡有

陽物反より

寛政七卯年二月廿六日小倉御將

の時分乃の辨子と伝ふ
寛政八年年其二三条の勢を
とす
八月十二日御合力金法
大坂
寛政九年六月廿五日
とす
寛政十一年三月十日
席狩
寛政十一年秋
とす

安永七年七月十九日

大津藩稀葉純淨祖

大津藩小治部守祖玄菟改玄世殿

三言後

鈴木富次郎安見

後七代

同春秋改撰の法備ふ系多き小
小笠原れ射式と海村清田の如
江戸府小止先ら也

同年九月廿七日憲的少後有て
瑞物_ニと結_ル

同年十月十日海村少後有て
明の十百宮中_ニに_テ石_ノ上_ニて_テ葉_ノ合_ニ結_ル

と給ふ

安永八亥年十一月廿野駒是と
治系

天明元丑年二月十日湯村
御流ありて器物と給ふ

同年九月日寇の御流ありて
器物と給ふ

天明二寅年二月日寇の御流
の對ふ加ありて時給と給ふ

天明三卯年二月曾湯村御流
ありて器物と給ふ

同年十月十日同一案湯流者て

明の十日當中に与りて黄金と
治系

同年十一月十日野駒是と給ふ

天明四辰年十月廿八日寇の御流
ありて器物と給ふ

天明六午年三月廿日湯村御流
者て器物と給ふ

天明七未年正月廿三日
新沖書天野
阿波守組

安永七戌年七月十九日

大津藩小幡後中守組主税利庸惣願

大津藩稻葉純行守組 三後 白井源之助利尚

後正以師

利尚京大坂丸宿也子系多事

度々

寛政十年年三月十三日 於任 新津藩小野

丸澤守組

安永七年七月十九日

大御書稀葉紙行守組

大御書稀葉紙中守組七之助改甚意願

言後 向山三層四政利

後四言

安永八年九月十二日法対法後

安永九年十月四日

安永九年十月四日

法後

石うりて

天明元年二月二日

の対子に列して時後

同年秋攻城の法流小系多景
病めて系らす

同年八月十八日淡の御殿を焼討
法流有て瑞物三と伝系

天明四年三月廿八日焼討法流
有て瑞物五と伝系

同年十月廿二日一帯法流有て
明の古言言中にありて英令二
と伝系

天明六年正月廿七日大的法流
の討手に候して時後二と伝系
天明七年三月廿七日田馬場

めておとろし法流られとの大的
御流ありて羅紗三と伝系

同年九月 日法流ありて
瑞物五と伝系

天明八年十月三日大的法流
の討手に候して時後二と伝系

寛政元年三月廿日法流ありて
是よりその二言俵は返しあり

寛政二年九月廿七日法流ありて
有て瑞物五と伝系

寛政四年七月廿日麻布の火災
めて表に中野所の郵敷少少ありてハ

月をぬく合評と貸し流系

寛政八辰年夏二系條の岩並に
多ふんとて江戸と云うに四月廿
三日申す狂疾めくわす

寛政八辰年四月十九日隠居云 作付

寛政十未年六月冒發之利とて
常雲と云

安永七辰年七月十九日

大津松平守組二番左衛門保和惣願

大津藩稲葉純行守組 三信 殿 於秀公而保教

改一平

安永八辰年五月朔日中里めく
半的涉後ありて器物と云ふ
天明元辰年秋坂條の勢と云ふ
多る處に小島系村對式と云ふ
江戸小止り也

天明二辰年二月廿六日大的涉後の對
に列して時彼と云ふ

天明四年三月廿五日草庵寺
天明七年正月廿二日
新津町山
勅免係組



